

司馬遼太郎

項羽と劉邦

下



新潮文庫

項羽と劉邦 (下)

新潮文庫

し - 9 - 33



昭和五十九年九月二十五日 発行
平成八年二月二十九日 四十一刷

著 者 司馬遼太郎

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

編集部(〇三)三三六六―五四〇

電話 読者係(〇三)三三六六―五一―
振替 〇〇一四〇―五―八〇八

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛と送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・大日本印刷株式会社 製本・加藤製本株式会社

© Ryōtarō Shiba 1980 Printed in Japan

新潮文庫

項羽と劉邦

下 卷

司馬遼太郎著



新潮社版

3262

項羽と劉邦
下卷

背水の陣

卷

下

5

韓信^{かんしん}は、転戦^{てんせん}している。

かれは漢^{かん}の上將軍^{じやうぐん}とはいえ、劉邦^{りゆうほう}のそばにいるわけではない。

つねに別働軍^{べつどうぐん}の将であつた。当然ながら劉邦にはかれ自身の戦局がある。これに対し韓信はそれと同心円^{どうしんえん}の戦局の中に身を置きつつ、劉邦の円よりもずっと外側で円をえがき、転々と戦場を動きながら勢力を増大していた。戦えばかならず勝つた。

「異彩だ」

ひとびとはいった。弱い漢軍のなかで、例外的な光りを放っているのは韓信とその軍だったからである。

——韓信^{かんしん}は自立するのではないか。

と、劉邦側近のひとびとは、口にくそ出さなかったが、かすかに警戒の目をもつてながめていた。

「酈生^{れいせい}」と半ば敬せられ、半ば軽んじられている儒者^{じゆしや}の酈食其^{れいきき}老人も、そのひとりだったと

いい。人の姓や名に生せいをつけてよぶのは、後世、書生の生になるが、この時代は先生というにちかい。

酈生は、韓信がすぎであった。

「木で鼻をくくったようなあののっぼめが」

と酈生がいうときは、愛情をこめていた。あいつの目はわるくない、何を考えているのか知らないが、という。

たしかに韓信は目だけは子供っぽかった。長身で、頬はまだ果物のようになつややかさをうしなっていない。ただ手入れを怠おこたった黒いひげがごみのように顔の下半分に散らかつていて、放心すると垂れたひげを唇かみのはしで噛んでいたりする。そのあたり淮陰わいゐん（江蘇省）城下の浮浪者の感じがぬけきっていない。

「お前さんは、とても儒者にはなれないね」

酈生がからかったことがある。

「その目だけでだめだよ」

酈生のいうには、儒者は大人びて深沈とした目を持っていなければならない、つねに自分の容儀にこまかく注意をほらい、人の前に出るときには威を内に秘めつつその外貌がいぎやうは温雅、その態度は恭儉、なかなかむずかしいものだ、という。

むろん、韓信は淮陰の貧士だったところから、一度も儒者になりたいなどとはおもわなかった。儒者など、葬式、墓参のたぐいの儀礼をことごとしく言うだけの存在で、葬式屋の顧問

のようなものではないかと思っている。

「酈老」

と、韓信はこの老人をよんでいた。

「たれも儒者にしてくれと頼んではいけませんよ」

韓信もこの老人が好きであつた。

「大きなまちがいだ」

すこし儒教を教わるほうがいい、と酈生はいつた。

「たとえばお前さんには、規準というものがないよ」

「なんの規準です」

「人としての生き方の規準、物の考え方、あるいは行動の仕方についての規準だ」

「規準はないほうがいいんです」

韓信は、蠅はえを追うようにいつた。

酈生は、教えようとしている。

「規準を学問という。規準のない人間は、人から信用されない。美でもない。美でなければ人から敬愛されない」

敬愛とは、具体的には、王である人や上長や同僚から好もしく思われるということである。
う。

「敬愛されるということは、要するに無害な人間として愛玩あいがんされるということではありませ

んか。お言葉返すようですが、私の志とはちがいます」

「どういう志だ」

「それがわかれば、世話はない」

韓信は、笑うと、こどものような顔になった。

右の対話は、韓信がなにかのことで劉邦に拝謁すべく前線からやってきたとき的情景である。場所がかつて県庁の庁舎であった建物の前庭で、大きな槐が葉を上げらせていた。酈生はその木蔭に入り、石に腰をおろしていた。立っている韓信は背に熱い陽ざしをうけて、酈生のために蔭をつくってやっている。長剣を杖がわりに突き、体の重みを半ば託していた。

「汚い剣だな」

酈生はからかった。

「しかも長すぎる」

たしかに韓信の剣は異様に長い。それに櫛頭の塗りが剥げ、青銅の飾りの小さな怪獣が磨耗し、鞘は傷だらけになっていた。

「私にとって、大切な剣です」

かれが淮陰城下で、洗濯婆から食をめぐまれながらほつつき歩いていたところからの剣であることは酈生も知っていた。韓信が漢の上將軍になってからもなおその頃の腰のものを離さないというのは、この男の感傷なのかどうか。

「要するにその剣も、あんたの自己愛のあらわれにすぎないんじゃないか」

酈生は、韓信というつかみどころのない男の精神を、袋の中の物でもさがすように手探っている。

「私に自己愛などありませんよ」

「ではその剣はなんのしるしだ」

「淮陰の頃の自分の気分かな。志といえばそうもいえません」

「幼いことを言うわい。……しかしお前さんののは」

志じゃないよ、と酈生は言いかけて遠慮した。酈生は当節、士の志というべきものは天下の蒼生を戦乱からすくい、これに食をあたえ、しかるのちに儒教という人間が人間であるための規律を与えることだ、と思っている。それには天下を興すに足る人を立て——劉邦のことだが——これを輔け、これに天下をとらしめることが先決だと考えているのだが、韓信の場合はどうであろう。

（こいつの正体はなんだ）

酈生は、考えた。この時代、乱世に身を投じた士卒のたれもが富貴を望んだ。しかし韓信は変わり者で、富貴を望まないに似ている。というより富貴とは何かが天性よくわからないのではないか。すくなくともそういう感覚に欠けるところがあり、たとえば一面、この男には貧窮のほうが似合っており、たとえ貧窮のまま生涯を送っても、他人の富貴をそねむところは全くないのではないか。

（この男の本質は、つまりは才能ということか）

酈生はおもった。才能だけが独立し、目も鼻も理性も抑制力もたずにまるい物体として谷を越え、山をかけのぼり、どこまでもころがってゆくなにかではないか。

（せめて、忠誠心でもあれば）

酈生はおもっている。

俠客あがりの諸將の多くは儒徒ではなかったが、忠誠心だけは持っていた。かれらはむしろそれを売り物にして劉邦とつよく結びつき、蝶が花に嘴をのばして蜜を吸うように劉邦から利益を吸いあげようとしていた。

劉邦は、そういうエネルギーの上に浮上している。かつて劉邦は、

—— お前たちはいい男だが、何の頼りにもならない。

と、左右をかえりみて言ったことがある。彭城（徐州）の大敗戦後、沼沢にさまよっていたときのこと、配下たちの頼りなさに劉邦自身、頭をかかえこんだ時期のことである。配下からいえば、無能であるために忠誠心だけで劉邦にぶらさがっていた。

韓信は、そのたぐいの男ではなかった。それだけに劉邦の忠誠な側近団に油断のならぬ男と見られている。酈生も時にそう思わぬでもない。

劉邦は、いそがしかった。

滎陽城から身一つで逃げだし、その根拠地の関中へむかった。そのあとを、項羽は追わな

かった。

もし項羽が全力をあげて劉邦のあとを追えば、歴史に漢帝国というものはなかったろう。追うことを献言する者がいなかった。もはや范増は去り、竜且や鍾離昧など不世出ともいべき猛将たちは前線にあり、しかも意見を差しひかえていた。かれらは項羽から疑われていた。この猜疑は陳平が項羽にかけた魔術にすぎなかったし、項羽もほどなくそれが敵の詐略だと気付くのだが、疑われた側の気分は晴れなかった。かれらが沈黙している以上、項羽の身辺には親類縁者しかおらず、策をたてる能力の者などいなかった。

それでも項羽とその楚軍は、漢軍を殲滅できるほどに強大であった。であるのに、身一つで逃げた劉邦を追えなかったのは、ゲリラが項羽の足をひっぱったためでもあった。

「鉅野（山東省）の漁師め、また出おったか」

項羽は、劉邦を追おうとしてそれを断念したとき、鞭をあげて地を打った。鉅野の漁師とは、彭越のことであった。かつて鉅野の沼沢で漁師をしつつ野盗の親分でもあったが、この乱世のなかで遅れて挙兵した。やがて漢王劉邦の傘下に入り、諸方で楚軍と小さく戦い、小さく破った。盗賊あがりらしく敵の弱点を見つけることが上手で、敵が強いときは穴にもぐるようにして頭を出すことはなかった。項羽が滎陽城の劉邦をかこんでいたときも、彭越が遊軍を指揮して後方の補給路をおびやかし、これに対して項羽はいちいち応酬したため、滎陽城に対して打撃力を集中することができなかった。劉邦が滎陽城を逃げだしたときもそうであった。

「彭越など、虻あぶのようなものではありませんか」

と、項羽の身边にもそのようにいつて默殺することをすすめる者もいたが、項羽は鹿をにがしても額ぬいを刺す虻をゆるせなかった。

つい主力をひっさげて旋回し、彭越軍を大いに破った。彭越は奔はり、その軍は四散した。このおかげで、劉邦は虎口こを脱し、関中にむかった。

劉邦は根拠地の関中へ帰ると、再び勢いをもちかえした。

関中はずねにかれの再起のための活力源になった。ここで新徵募ちようぼの兵を得、糧をあつめ、軍を新編成した。

「滎陽を救うのだ」

と、呼号した。むろん本気であった。この時期、かれが置きすてた滎陽城はなお健在で、残留の將の周苛しゅうかが、城壁一重ひとへをたよりに楚軍と惡戦苦闘していた。

——かならず滎陽に再来して救援する。

——ということ、劉邦は周苛にもいい、諸將にもいつていた。味方に対するこの約束をはたさねば、劉邦は信をうしなう。味方の忠誠心の上に浮上している劉邦としては信だけで立っている。ひとびとに信じられなくなれば、劉邦のように能も門地もない男はもとの塵芥ちりくたにもどらざるをえない。

——出来そこないの田舎俠客、沼沢のなかの泥どろぶなのような草賊の親分。

——というのが、劉邦も自認しているかれの前半生であったが、その経験で学んだことといえ

ば子分や兄弟分に対する信じかなかった。信が、めしを食わせてくれる。なんとか人が集まり、人が協きやくけてくれた。

挙兵のときもそうであった。人望りきやうといい、吏才りさいといい、物事をふかく考える能力といい、蕭何しょうかのほうのはるかに上で、沛はいの父老ふらうたちも、

——蕭何さんを立てればどうか。

と、少年たちに説いていた。蕭何はそれを辞し、みずから劉邦を推戴すいたいして衆にもすすめ、自分はくだってその事務役にまわった。ひとびとは劉邦をいかがわしく思ったが、蕭何は動かなかった。劉邦には信がある、と蕭何は思っていたのである。

(……しかし、ここで)

周苛たちを救うべく再び滎陽へゆくということは項羽に再び敗まけ、こんどこそ殺されるということであった。

(虎とらの顎あごのなかにもどるということだ)

関中の咸陽かんやうでの劉邦は、身の処すすべもないほどに苦しかった。

この時期、惑乱したこともある。

「たれか、いないか」

おれに代わりたいたいという者は——と、食事の途中、箸はしを投げだしてわめいたのである。

本気であった。それ以上に切迫した思いで、声は半ば泣いており、表情は運命にむかつて哀願あいがんしているようであった。項羽にはとても勝てない、自分は巴蜀はしよくの山の中に退ひいて百姓で

もしたい、巴蜀は遠い、沛のほうがいい、もし出来れば沛にわずかな土地でももらって老後を送りたい、と叫んだ。

劉邦は、天下に望みを持つなどという気持は捨てていた。捨てれば、気が楽になった。

「たれかいなか」

おれはその男に代わる、と叫びつづけた。さしあたっては、滎陽へゆくことがわかった。しかしゆかねば、信をうしなう。

そのまわりには、食事の給仕人しかいない。かれらはあわててひとびとに連絡した。張良（ちやうりやう）が入ってきた。

「張良、お前、どうだ」

劉邦はすくわれたように張良の袖（そで）をとり、自分がすわっていた場所にすわらせようとした。卓子の上には食い残しの料理が散乱（さんらん）していた。張良はしずかに劉邦をすわらせ、あなたしかいないのだ、ということ（じゆんじゆん）を諄々（じゆんじゆん）と説きかかせた。

劉邦は顔をあげて、ぼう然（ぼうぜん）としている。

（この陛下（ひと）は、滎陽へゆくことのみを怖（おそ）れているのだ。それだけで錯乱（さくらん）したのだ）と、張良は劉邦の心事を察した。しかしどうすることもできない。

このとき末座から、

「策を申しあげてよろしゅうございますか」

と言った者がある。袁生（えんせい）という、平素めだたない男であった。

「袁生か」

劉邦は、ふしぎな顔をした。こんなつまらない男がおれに代わりたいというのか。

「直接滎陽へいらっしゃることは、かえって周苛たちを敗死させることになります。いったん南方の宛えん（南陽）へお出遊ばせば、滎陽城も息をつくことができ、項羽も奔命ほんめいに疲れる、ということにもなりましょう」

「お前はなにを言っているのだ」

劉邦の叫びに対する答えにはなっていない。

「くわしく申しあげます」

と、袁生はいった。

関中台地を自然の一大城廓じょうかくとすれば、その正門（東門）が函谷関かんこくかんにあたる。ほかに南門（正確には南東方面への門）として、武関ぶかんの開口部があった。袁生のいうのはこの函谷関から出ず、武関から打って出なさい、ということである。しかるのちに南方の宛の城に入り、付近の葉しやう（葉県）の城をもおさえてあらたに南方戦線を形成せよ、ということであった。この間、項羽は北方（黄河沿岸）の滎陽城を攻囲している。南方の異変におどろき、項羽自身、あわてて主力をひきいて南方の宛にやってくるにちがいない。その間、滎陽城は息をつける、というのである。

「項羽はかならず宛にくるか」

と、劉邦は問うた。